

明治後期から昭和初期の大阪近郊における遊園地と花柳街 —都市娯楽施設の史的研究—

正会員 ○安野 彰*

遊園地 娯楽施設 大阪近郊

1 はじめに

東京においては、大正 15 年に遊園地取締規則が警視庁によって制定されている。この条例が制定された背景については、当時警視庁の警視であった重田忠保が、遊園地が連込み的な経営に走りかねないためと概説していた。また、東京近郊では、こうした危惧を裏付けるように、遊園地は花柳街の近傍に立地していた。これらの点については、これまでも別稿で指摘してきた¹。

大正 10 年、雑誌『庭園』で遊園地特集号が生まれ、施設に対する批判が論じられたが、内容は、東京に限らず大阪近郊を含む遊園地一般に対するものもあった²。また、同時代、遊園地や類縁施設が最も発達していたのは大阪近郊であり、この地方での実態が施設一般に対する認識を形成する一助となったことが推測される。本稿では、こうした観点から、当時、大阪近郊に開設された遊園地について、花柳街との関係を検討する。

2 大阪近郊の遊園地に対する批判的視線

関西地方の遊園地を含めて批判している記述として、椎原兵市が、大正 10 年の『庭園』遊園地特集号で論じているものがある³。関西地方の遊園地について、結局は営利目的であること、内容や設備の一過性を、「不健全なる組織」、「低級趣味」といった言葉で評している。ここでは、宝塚新温泉と少女歌劇も、名指しの批判を受けている。

宝塚新温泉は、批判に対し、反応を示している。少女歌劇を擁する宝塚新温泉を経営する小林一三は、大正 6 年に上演された自作の演目『夜の巷』において、宝塚が「青年子女が一堂に集まる機会が多くて」「危険が伏在する」場所と評されることに対し、「宝塚の経営は、一家族打連れて遊びに行けるやうに、高尚に、家庭本位に、清新なる娯楽場」と、宝塚新温泉の安全性を主張する内容が盛り込んでいる⁴。さらに、新世界ルナパークや千日前楽天地といった大阪市内の娯楽施設を、「パチルスをついたあんこ」か「不衛生的の牡丹餅」と批判している。また、大正 11 年には、「生徒と其父兄へ」と題した記事が、小林一三の名前で掲載される⁵。ここでは、少女歌劇に対する社会的な評価が一部で適切でないことに言及し、そうした批判的な意見には、自らを律することで理解を得ようという一三の意志が歌劇学校生徒とその親に向けて伝えられている。そして、

「寶塚をして阪神間の唯一の純潔なる、高尚なる、そして一家打ち連れての行楽に最もふさはしい遊覧場たらしむるにあるので、寶塚舊温泉方面は舊来のまゝ自然の發達におまかせするとして、新温泉側は理想的に建設することにしてゐる即ち運動場、遊園地、テニスコート、植物園、簡易圖書館、大歌劇場、等統一した計畫のもとに進行したいと思つてゐる、そして、武庫川の北岸即ち新温泉側は藝妓や遊び人とは没交渉にしたい、これは既に其筋に會社の意見を陳情してゐる、そして、家庭的に完全なる遊覧場たらしめるのであるから、學校の先生方も、大阪神戸近郊の各遊覧地に比較して、又、道頓堀や千日前の活動写真や見世物小舎に比較して、矢張り寶塚が家庭的行楽には、一番よい所であるといふ考が自然に浮んでくる、公平な判断をする、今日寶塚は歌劇があるからイケないといふやうに考へて居る人々をして寶塚大賛成と言はしめるやうに、其實質を皎潔に外觀を清新にしななければならない、」⁶

として、対外的な誤解を招かないためには、「実質」である少女歌劇の生徒の品行に気を配るとともに、「外觀」では、武庫川を挟んで対峙する旧温泉と対照的な娯楽地帯を形成することが家庭的娯楽場として成功する手段と結論づけている。このことから、芸妓や遊び人の跋扈する花柳街としての旧温泉と新温泉・少女歌劇のあり方が、少なくとも一部の人々には関連づけて考えられ、それが批判の一因になっていた状況があったことを示していると考えられる。

また、昭和七年、当時、内務技師であった北村徳太郎が雑誌『都市公論』上で、遊園地には豊島園や花月園、宝塚を含むとしたうえで、それが営利を主眼とする「危険な代物」であること、その中には健全なものと言えないものもあって、取締のない状況では、これが必ずしも行政にとって望ましい娯楽場とはなり得ないことを述べている⁷。大阪及び東京近郊の遊園地は、大正末には、宝塚のルナパーク、鶴見花月園の拡張などを契機に、家族、子供、保健といった主題を明確にする経営に移行する傾向を示すようになる。この北村の見解は、それより後の昭和 7 年に記されたものであるが、その当時においても、行政の遊園地に対する認識は、依然として必ずしも芳しいものではなかったと考えられる。

3 大阪近郊の遊園地と花柳街

宝塚以外の事例にも、花柳街との関係を窺える。

明治40年に開設された香櫨園は、阪神電鉄が経営に関っている。当時の地誌によれば、動物園、博物館のほか、奏楽堂、ウォーターシュート、メリーゴーラウンド、運動器具、眺望閣という展望台などが設置されていたとある⁸。動物園を宣伝する新聞広告では、「坊っちゃん嬢ちゃん」という文句が目立つ。香櫨園については、こうした近代的な設備や子供向けの娯楽についての言及が多いが、同地誌には、これに対して、

「中にも旅館料理店等の如き各所に散点し、芸妓数十人を有せりといへり」

と記述されているように、園内には、宿泊施設や飲食店が数多く散在し、数十人の芸妓を擁して、成人男性向きの遊興的な娯楽に供した様子を同時に見ることが出来る。

長野遊園は、明治41年、南海高野線の終点に開設された。河内長野駅の東に位置する富山の山腹を開発したもので、花卉や花樹を植え、運動場、余興場、料亭の支店、人工の飛瀑などが設けられていた⁹。遊園地の周囲には、料亭の本店と旅館が集っていたようで、当時の新聞記事には、そこで三絃の入る宴会が行われる様子が報じられている¹⁰。遊園地は、遊興的な娯楽に附随しているものと見做せる。その後も遊園地の門前に、新地として料亭旅館街が開発される。

明治45年に開設された新世界ルナパークは、当初はサークリングウェーブ等の最新の遊戯機械を設置した娯楽場であったが、経営不振に陥る。近傍に飛田遊廓ができたこともあり、娯楽場のあり方が変化する。結果、庭園を日本風に改め、催しも改変された。暫く営業を続けるものの不振で劇場街になり、大正14年に閉園する¹¹。

大正元年に開設の枚方遊園では、駅を挟んで桜新地が開発され、新地の芸妓が園内で余興を行ったとされる¹²。

大正14年開設の市岡パラダイスから程近い新池田町附近は、置屋、検番、料亭等がならぶ花柳街であった¹³。安治川遊園地附近で、電気博覧会閉会后に形成された港新地も市岡パラダイスに至近である。

また、大正15年に開設の菖蒲池遊園地では、昭和4年、駅の南側にあやめ新地が設置され、検番1戸及び料理旅館兼置屋10戸前後が建設された。これらの施設は、まもなく組合を組織し、三業地としての体裁を整える¹⁴。このような花柳街開設において、顧客が芸妓を呼ぶ際に温泉場や遊園地を利用することが想定されたのかは不明だが、そうした利用の方法については、新地が開業して数年後の新聞が以下のように報じている。

「貸間を遊園地に建築。午後三時から夜九時まで使用料一圓五十銭、朝から終日使用の場合は二圓五十銭で新地の芸妓も呼べる。」¹⁵

「新地の芸妓は目下四十三名、花代八十銭、遊園地経営の借間を加へて料亭二十餘軒もあるだけに絃歌さんざめき芸妓は八十%の売れ行き。」¹⁶

「遊園地の貸室は姐さんも呼べるので日曜祭日は満員箱切れの有様だが温泉貸間も同様だが家族浴室は空いてある。」¹⁷
すなわち、遊園地内の貸間や貸室あるいは温泉場の貸間に新地の芸妓を呼び込むことができたことが判る¹⁸。

このように、遊園地が花柳街に近接するだけでなく、香櫨園や長野遊園では、積極的に娯楽の要素として関連づけられていたことを窺える。菖蒲池では、後年になっても、こうした関係を容認している。

4 まとめ

大阪近郊の遊園地に対する批判として、公益に供しない、低俗、という見解があったほか、宝塚では、青年子女が多数集まることが問題視された様子を窺えた。宝塚新温泉を経営する立場の小林一三は、事態に際して、娯楽場を清新なものとして提示するための一方策として、花柳界や花柳街との差異を明確にすることを挙げていた。すなわち、花柳街との関係の取り方が、遊園地のあり方を性格づける重要な指標になっていたといえる。事実、同時代の大阪近郊の遊園地では、花柳街と立地が近接するだけではなく、営業においても関係を持っていた事例が複数認められた。昭和に入ってからこのような関係が容認される場合もあった。遊園地と花柳街のこうした関係は、行政を含む社会一般に、少なからず批判的に見られる一因になっていたと考えられる。宝塚に対する視線も、新温泉そのもののあり方に拘わらずとも、同時代の類縁施設の実態を背景に形成されたと推測される。

註)

¹ 安野彰、篠野志郎「遊園地取締規則」にみる明治・大正期の東京近郊の遊園地の概念—都市娯楽施設の史的研究—『日本建築学会計画系論文報告集』1998年4月(No.506)ほか

² 『庭園』第3巻第6号 日本庭園協会 大正10年5月

³ 椎原兵市「大阪地方遊園地と都市の遊園地」『庭園』第3巻第6号 日本庭園協会 大正10年5月 pp.17-19

⁴ 小林一三『歌劇十曲』玄文社 大正6年 所収

⁵ 小林一三「生徒と其の父兄へ」『歌劇』No.31 大正11年10月、pp.2-6

⁶ 同上

⁷ 北村徳太郎「公園とは？及其他の都市戸外娯楽園地の分類」『都市公論』第15巻第3号 都市研究会 S7 pp.50-51

⁸ 大久保透『最近の大阪市及其附』大久保透 明治44年 pp.494-497

⁹ 『高野鉄道沿線案内』明治44年12月 付図

¹⁰ 大阪毎日新聞 明治43年10月30日 pp.6-7

¹¹ Cf. 徳尾野有成『新世界興隆史』有田薫 昭和9年

¹² 『目で見える枚方・交野の100年』郷土出版社 p.52

¹³ 永瀧五郎『市岡パラダイス』講談社 昭和59年 p.36

¹⁴ 中村安雄『菖蒲池・最大時の地理的考察』私家版 発行年不明 p.45、『伏見町史』伏見町史刊行委員会 昭和56年 p.378

¹⁵ 大阪朝日新聞 昭和5年11月20日 p.9 (奈良版)

¹⁶ 大阪朝日新聞 昭和6年1月21日 p.9 (奈良版)

¹⁷ 大阪朝日新聞 昭和6年4月7日 p.9 (奈良版)

¹⁸ 菖蒲池遊園地については、安野彰「戦前期におけるあやめ池遊園地の開発と変容」『第71回 研究報告集』日本建築学会関東支部 2001年3月 pp.557-580 にて報告している。